

2020 年度 センター試験 本試験 地理 B 【解答】

問題 番号	設問	解答 番号	正解	配点	問題 番号	設問	解答 番号	正解	配点
第 1 問 (17)	1	1	1	2	第 4 問 (17)	1	19	3	2
	2	2	3	3		2	20	4	3
	3	3	2	3		3	21	1	3
	4	4	4	3		4	22	3	3
	5	5	2	3		5	23	1	3
	6	6	6	3		6	24	1	3
第 2 問 (17)	1	7	2	3	第 5 問 (14)	1	25	2	2
	2	8	4	2		2	26	3	3
	3	9	4	3		3	27	3	3
	4	10	6	3		4	28	2	3
	5	11	4	3		5	29	2	3
	6	12	3	3					
第 3 問 (17)	1	13	2	3	第 6 問 (18)	1	30	5	3
	2	14	2	2		2	31	2	3
	3	15	3	3		3	32	2	3
	4	16	1	3		4	33	1	3
	5	17	4	3		5	34	3	3
	6	18	1	3		6	35	1	3

2020 年度 センター試験 本試験 地理 B

第 1 問

出題範囲	世界の自然環境と自然災害
難易度	★★★★☆
所要時間	得意：7分　ふつう：8分　苦手：9分
傾向と対策	設問別の難易度にばらつきはあるものの、世界の気候と大地形に関する知識で解ける問題が多い大問であった。特に気候はそのまま出題されるだけでなく、問 5 のように問題を解く手掛かりにもなる。問題文が示している地域の気候が分からなかった高校生は、地図帳を見て復習しておこう。

問 1 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

各地域での地理的特徴について考える問題。それぞれの地域の標高と気候を思い出しながらかいていこう。

- ① C が当てはまる。C はラブラドル高原をさす。ラブラドル半島では、氷河期に多くの部分が氷河に覆われており、氷床が解けるときに地表を削ってできた氷河湖の跡なども見られる。
- ② A が当てはまる。A は中緯度高圧帯の影響で年間を通して降水量が非常に少ないため、ワジ（^か涸れ川）や砂漠の中の緑地であるオアシスが見られる。
- ③ D が当てはまる。D はギアナ高地をさしている。ベネズエラやブラジルなどにまたがるギアナ高地はオリノコ川やアマゾン川に囲まれた高地のことで、地形の柔らかい部分が削られることで形成されるテーブルマウンテンがいくつもある。
- ④ B が当てはまる。B はチベット高原をさしている。チベット高原は平均標高が 4500m といわれる高原で、標高が高いため寒冷な気候が広がり、永久凍土も分布している。

以上より、正解は①である。

問 2 正解は③

難易度 ★★☆☆☆

解説

ハイサーグラフから該当する地域を選択する問題。7~9 月の気温が 1 年の中で最も高くなっており、北半球に位置すると考えられる③、④と 11~1 月の気温が最も高く南半球に位置すると考えられる①、②で分けて考えよう。

- ① 1 月の月平均気温が最も高いことから、南半球に位置するア、エのいずれかとわかる。特に、①は年中湿潤な気候であり、西岸海洋性気候のエとわかる。エは肥沃度の高い土壤をもつパンパが広がり、小麦やト

ウモロコシの生産や牛の放牧が盛んである。

- ② 7月の気温が最も低く 11月の気温が最も高いことから、南半球に位置するア、エのいずれかとわかる。特に②は5~9月の冬季に降水量が少ないことから、ステップ気候に属するアとわかる。アでは冬季に中緯度高圧帯が北上することで降水量が激減する。
- ③ 7~9月の気温が最も高いことから、北半球に位置するイ、ウのいずれかとわかる。特に③は気温の年較差が小さいことから、暖流のアラスカ海流により緯度のわりに冬季も温暖であるウが当てはまる。ウは西岸海洋性気候であり、年中温暖湿潤な気候である。このように、暖流や寒流が沿岸の気候に影響を与える例は多い。この機会に主要な海流の位置と、暖流・寒流のどちらかを確認しておこう。
- ④ 7月の気温が最も高いことから、北半球に位置するイ、ウのいずれかとわかる。また、④は気温の年較差が非常に大きいから、内陸部に位置するイとわかる。

以上より、正解は③である。

問 3 正解は②

難易度 ★★★★★

解説

地震と火山の発生について、地域ごとに考える問題。難易度が高い問題であり、わからなかった人は世界の大地形を復習したい。

- カ イタリアとバルカン半島のあたりをさし、アルプス＝ヒマラヤ造山帯に位置している。新期造山帯であり火山がみられる。また、ユーラシアプレートとアフリカプレートの境界に位置しており、地震も多くみられる。
- キ スーチョワン盆地あたりをさしてあり、このあたりは古期造山帯や安定陸塊である。よって活火山はなく、地震も頻発しない。
- ク アメリカ合衆国のアラスカ南部をさしている。このあたりは、環太平洋造山帯に位置しており、火山が多いと考えられる。また太平洋プレートと北アメリカプレートの狭まる境界に位置し、地震もおこりやすい。
- ケ ブラジル高原東部をさしている。このあたりは安定陸塊が広がりプレートの境界もないため地震や火山はほとんどみられない。

以上より、地震の震源と火山の両方が分布する地域の組み合わせはカとクであり、正解は②である。

問 4 正解は④

難易度 ★★☆☆☆

解説

気圧帯の模式図から、実際の気候を考える問題。高圧帯では下降気流が発生するため雨が降りにくく、低圧帯では上昇気流が発生するため雨が降りやすい点をおさえておこう。

- ① 正 図3を見ると、サの地域は1月・7月ともに高圧帯に属している。高圧帯では下降気流が発生するため雨が降りにくくなり、サでは年間を通じて雨が降りにくいと考えられる。

- ② 正 図 3 を見ると、シの地域では年間を通して低圧帯に位置している。低圧帯では上昇気流が発生するため多量の雨が降りやすくなり、シでは年中多雨になりやすい。
- ③ 正 スの地域は 7 月のみ高圧帯に位置している。高圧帯では前述のとおり少雨になりやすいため、7 月に乾季になり、高圧帯に属さない 1 月には雨季になりやすいといえる。
- ④ 誤 セの地域は南半球であり、7 月は冬季で気温が低くなると考えられる。よって④は誤り。なお、セの緯度帯では 7 月は低圧帯に属しており上昇気流の影響で雨が降りやすいと考えられ、乾燥する気候についても誤りといえる。

以上より、正解は④である。

問 5 5 正解は②

難易度 ★★★★★

解説

樹木の高さや地域を結びつける問題。地域ごとの気候を把握していれば解きやすいだろう。

- ① S が当てはまる。S 地域について、北部はブラジル高原西部であり低緯度に位置するため熱帯雨林が広がっている。また、南部ほど高緯度になり、気温が下がり気候も温帯に近くなっていく。よって南部では樹木の高さが低いと考えられる。
- ② Q が当てはまる。Q 地域は、全体が冷帯であり針葉樹林が広がる地域である。針葉樹林の純林のことをタイガということもおさえておこう。
- ③ R が当てはまる。R の位置するオーストラリア内陸部は砂漠気候が広がり、ほとんど樹木は植生できない。
- ④ P が当てはまる。P は南端が赤道に最も近く熱帯雨林気候であり、北部にいくに従い中緯度高圧帯の影響を受けやすくなるためサバナ気候となる。よって、南部では非常に背丈が高い樹木が植生し、北部にいくに従い徐々に樹木の高さが低くなっている。

以上より、正解は②である。

問 6 6 正解は⑥

難易度 ★★★★★

解説

世界の自然災害をそれぞれの地域の自然環境などから推測する問題。

- タ タの図を見ると、メキシコやカリブ海周辺で非常に多く、その他の地域ではほとんど被害がない。これは、北大西洋や太平洋東部で発生し、北上するハリケーンと考えられる。ハリケーンは発生地域に限られており、貿易風や偏西風により経路も一定となるため、被害を受ける地域が集中している。チ、ツと比べ災害の回数が多いことから熱帯低気圧と考えてもよい。なお、一定風速以上の場合、北太平洋西部で発生した熱帯低気圧を台風、大西洋・北太平洋東部で発生した熱帯低気圧をハリケーン、インド洋で発生した熱帯低気圧をサイクロンという。

チ タやツと違い、カリブ海地域での被害がない。カリブ海周辺には太平洋プレートやココスプレート、カリブプレートなど様々なプレートの境界があり環太平洋造山帯にも含まれるため地震が多いと考えられる。よってチは森林火災と考えられる。チで回数が多い地域を見ると、ロッキー山脈やアンデス山脈が広がる地域であるとわかる。

ツ ツはカリブ海周辺を中心に北アメリカ大陸や南アメリカ大陸の西部に被害が集中している。これは、環太平洋造山帯と重なっており、地震と考えられる。

以上より、地震 - ツ、森林火災 - チ、熱帯低気圧 - タの組み合わせとなる⑥が正解である。

(柿沼麻衣花, 小池優希)

2020 年度 センター試験 本試験 地理 B

第 2 問

出題範囲	資源と産業
難易度	★★★☆☆
所要時間	得意：7分　ふつう：8分　苦手：9分
傾向と対策	基本的な知識をベースとした問題が多く、データと知識を結び付けられる受験生とそうでない受験生で差がつく大問であった。問題文にデータの読み方に関するヒントが書かれていることが多いので、解く前にしっかり問題文を読むようにしよう。また、今回全ての大問が頻出のテーマであるため、間違えた高校生はしっかり復習するようにしたい。特に第 5 問については該当する国を調べるだけでなく、様々な国の発電方法の変遷を調べてみるとよい。

問 1 7 正解は②

難易度 ★★☆☆☆

解説

レアメタルの輸入量の変遷から該当する国を選ぶ問題。問題文から、マンガンはレアメタルの 1 つであり、生産国は限られていること、鉄鋼の生産に用いられることの 2 点を読み取り、鉄鋼生産量を念頭におきながら答えていきたい。

- ① インドが当てはまる。インドは BRICS の 1 つに数えられており、特に 2000 年以降工業化が著しい。なお、インドの鉄鋼生産は現在中国に次ぐ 2 位(2019 年)であり、このことから①とわかる。
- ② 韓国が当てはまる。韓国は 1980 年代以降工業化が進み、鉄鋼の生産量も増加している。鉄鋼生産量が世界 3 位(2019 年)の日本と迷う高校生もいると考えられるが、徐々にマンガン輸入量が増加していることから、2000 年以降も徐々に鉄鋼生産量が増加している韓国とわかる。
- ③ 日本である。日本は現在でも鉄鋼生産量が世界 3 位(2019 年)だが、高度経済成長期に鉄鋼の生産が急増した後、石油ショックを通じ重厚長大な産業から軽薄短小な産業に産業構造が転換し、2000 年以降は生産量の伸びは停滞している。
- ④ スペインである。2000 年以降生産量が停滞していること、生産量が日本のように多いわけではないことから類推できるとよい。スペインではビルバオの鉄鉱石を利用した鉄鋼業が盛んであったが、現在資源の枯渇などにより衰退している。

以上より、正解は②である。

問 2 8 正解は④

難易度 ★★★★★

解説

水産業に関する文から誤っている選択肢を選ぶ問題。

- ① 正 1970 年代まで日本における魚介類の自給率はほぼ 100%以上だったが、高度経済成長期に第一次産業の衰退が進んだことで、国内の水産物需要を国内生産では賅えなくなり、輸入量も増加した。
- ② 正 2000 年以降、安定的に生産できることや栄養価を高めることができるなどの理由から中国を中心に養殖業の割合が増加している。特に中国では河川や湖沼での内水面養殖により鯉などの淡水魚の養殖が盛んに行われている。
- ③ 正 大陸棚とは、陸地だったところが沈水してできた、水深 200m ほどまでの浅い海底のこと。なだらかな傾斜で数十 km 以上にわたり遠浅の海が広がる。大陸棚には一般的にプランクトンが多く、好漁場となっている。なお、天然ガスや鉱山資源といった資源も豊富である。
- ④ 誤 沖合漁業とは、200 海里内で行われる漁業をさし、基本的には排他的経済水域内の漁業であるため、排他的経済水域の設定が原因で沖合漁業は激減していない。排他的経済水域の設定により漁獲量が減少したのは、より遠隔地で漁業を行う遠洋漁業である。なお、沖合漁業の漁獲量が減少したのはいわし類の資源量の減少や石油価格の上昇による。

以上より、正解は④である。

問 3 9 正解は④

難易度 ★★★★★

解説

輸出品目の内訳の変化から当てはまる国を選択する問題。「産業構造の変化は輸出品目の内訳に反映される」という問題文の記述をヒントにし、各国の産業構造に注目して解くとよい。

- ア 産業構造が早期に高度化したシンガポールでは 1990 年、2015 年ともに輸出額割合 1 位で、トルコでは 1990 年には 6 位以下だったが 2015 年には 4 位になっている。以上から、産業構造が高度化する過程において生産量が増加する電気機械とわかる。
- ウ 産業構造が早期に高度化したシンガポールでは 1990 年、2015 年ともに輸出額割合が 6 位以下と非常に小さく、トルコでは 1990 年には 3 位であったが、産業構造の高度化に伴い 2015 年には圏外になっている。以上から、第一次産業に属する果実類が当てはまる。果実類などの一次産品は、生産の過程で高度な技術を必要としないため、経済成長が進行していない国で盛んに生産される。
- イ 産業構造が早期に高度化したシンガポールでは 1990 年のみ 4 位であり、トルコでは 1990 年に 1 位だったのが 2015 年には 2 位に下がっている。産業構造が高度化していくと、一次産品、軽工業、重工業の順に産業の中心が変遷するため、イは軽工業で生産される衣類と考えられる。

以上より、ア - 電気機械、イ - 衣類、ウ - 果実類の組み合わせとなる④が正解である。

問 4 10 正解は⑥

難易度 ★★★★★

解説

米の生産量・貿易量から正しい地図を選ぶ問題。米の生産量や輸出・輸入量については、受験する前に必ず知っておきたい内容なので、間違えた人は復習したい。

カ インドで少ないことから、輸入量とわかる。インドでは米の生産量・輸出量が世界有数であるが、輸入量は多くない。米の生育に適さない気候の中東地域で世界全体に占める割合が多いことから予想できるだろう。

キ キ、クはそれぞれ生産量・輸出量のいずれかであること、生産と輸出は非常に似た傾向があり単体として判断するのは難しいことから、キとクは比較して解くことをおすすめする。キはクと比較して中国の割合が小さく、南北アメリカやベトナム、タイの割合が大きくなっていることが読み取れる。よって輸出量と考えられる。インド、ベトナム、タイの米の輸出量が多いことは有名なので、その知識も含めておさえておきたい。

ク キと比較すると中国の割合が大きい。中国では生産量は世界で最も多いが、人口の多さから自国で消費するため輸出量は少ない。以上から、生産量とわかる。米は国内で消費される傾向の強い作物であり、アジア地域においては、人口の多い国ほど生産が多くなっている。

以上より、カ - 輸入量、キ - 輸出量、ク - 生産量の組み合わせとなる⑥が正解である。

問 5 11 正解は④

難易度 ★★★★★

解説

年間発電量に占める風力発電の割合が大きい国を選ぶ問題。

- ① イラン 条件に該当していない。国内で豊富に産出される石油・天然ガスを利用した火力発電が中心である。2011年にロシア主導のもと原子力発電を導入し、さらに欧州企業が再生エネルギー部門に参入して太陽光や風力発電も行われているが、今後もしばらく天然ガス火力が電力供給の中心を担うと考えられる。
- ② カナダ 条件に該当していない。水力発電が中心である。カナダは豊富な水資源とロッキー山脈などの高低がある土地を活用した水力発電が全体の発電量の半分以上を占める（2015年）。
- ③ 台湾 条件に該当していない。台湾は、石炭・天然ガスによる火力発電が総発電量の大きな割合を占める。台湾では2017年に、2025年までの脱原発の実現と、再生可能エネルギー比率20%の達成を目指す計画が決定された。太陽光発電中心に今後再生可能エネルギーの割合が増加していくと考えられる。なお、風力発電は季節風の影響から導入が難しく、今後も総発電量に占める割合は少ないとみられる。
- ④ ポルトガル 条件に該当している。ポルトガルでは経済成長による電力需要の増加に伴い火力発電の割合が大きくなっていったが、エネルギーの7割ほどを他国からの輸入に依存する状態を脱却しエネルギー自給率を向上させるため、2010年に国家エネルギー戦略を制定し、エネルギー自給率の向上を図った。現在は水力発電・風力発電・太陽光発電といった再生可能エネルギーによる発電が盛んである。

以上より、正解は④である。

問 6 12 正解は③

難易度 ★★★★★

解説

人口 1 人当たり GNI や研究開発費、労働人口に占める金融・保険業の従業者割合から該当する国を考える問題。問題文冒頭を参考に、それぞれのデータを経済のサービス化や知識産業化の進展の度合いを表す指標として考えられるとよい。

- ① スイスとわかる。スイスのチューリヒはロンドン・ニューヨークと並ぶ世界の金融市場の中心であり、労働人口に占める金融・保険業の従業者割合の高さに反映されている。また、スイスでは製薬・化学といった産業が中心であり、知識産業化が進展しているため、人口 1 人当たり研究開発費も多いと考えられる。
- ② サウジアラビアと考えられる。まず、人口 1 人当たりの GNI が高いことから、日本またはサウジアラビアとわかる。また、人口 1 人当たり研究開発費が大きいことから知識産業化が大きく進展しているわけではないことが、労働人口に占める金融・保険業の従業者割合が低いことから経済のサービス化はそこまで進んでいないことが考えられる。よって、石油資源の輸出により外貨を獲得し GNI は多いが、知識産業化の進展は先進国ほどではないサウジアラビアとわかる。
- ③ ②と同様に、人口 1 人当たりの GNI が高いことから、日本とわかる。なお、研究開発費の多さや金融・保険業の発達から、先進国であり高度技術・高付加価値産業が発達している日本と考えてもよい。
- ④ ハンガリーとわかる。人口 1 人当たり GNI が他国より少ないことから、東ヨーロッパに位置し旧社会主義国であるハンガリーとわかる。

以上より、正解は③である。

(柿沼麻衣花, 衛藤健)

2020 年度 センター試験 本試験 地理 B

第 3 問

出題範囲	都市と村落
難易度	★★★☆☆
所要時間	得意：10分　ふつう：12分　苦手：14分
講評	都市に関する知識だけでなく統計の読み取りが求められ、全体として思考力を要する大問であった。問2や問3などの知識問題に不安があった生徒は周辺事項を含めて復習すると良い。また、問6で登場したメッシュマップなど、統計地図を扱う問題にも慣れておこう。

問 1 正解は②

難易度 ★★★☆☆

解説

地域ごとの大都市の分布について考える問題。各地域の人口やその推移について大まかな知識を持っておこう。

- ① イが当てはまる。表を見ると①の地域は元から大都市が多く、現在も増加していると分かる。イの緯度帯には人が住みやすい温帯が分布している。そのため、経済発展が進んだ地域(ヨーロッパ南部、中国・韓国・日本、アメリカ合衆国)が多く、大都市数も多いイが①と分かる。
- ② ウが当てはまる。ウの地域は中国南部やインド・バングラデシュ、メキシコなど近年人口が著しく増加している国々を含んでいる。よって、大都市数が爆発的に増えている②と分かる。
- ③ アが当てはまる。アの地域は大部分が冷帯に属し、ヨーロッパ以外は人口密度の低い地域となっている。また、また、人口増加率が低い先進国が多くを占めている。そのため、大都市数が少なく、その変化も小さい③と分かる。
- ④ エが当てはまる。赤道直下のエの地域は陸地面積の占める割合が小さく、経済発展が進んでいなかったため大都市数も少なかった。しかし、近年の人口爆発や著しい経済発展を背景に、大都市数が急激に増えている。よって、エは④と分かる。

以上より、正解は②である。

問 2 正解は②

難易度 ★★★☆☆

解説

「各国における都市ごとの人口を正確に把握する必要があるのか」と戸惑った生徒もいるかもしれない。しかし、この問題で問われている「人口規模第1位の都市の人口が、第2位の都市の人口の2倍未満である国」を「人口が最大都市に集中していない国」と読み替えると、既存の知識で解くことができる。

地域の中で最も規模が大きく、他の都市を大きく引き離す都市を「プライメイトシティ(首位都市)」と呼ぶ。この問題を解くときには、主な「首位都市」の知識や、選択肢の四つの国における大まかな人口分布を把握しておく必要がある。それでは、それぞれの国についてみていこう。

- ① 該当しない。エチオピアの首都・最大都市であるアディスアベバ(首位都市)の人口は 317 万人(2014 年時点)であり、2 位以下の都市を大きく引き離している。発展途上国であるエチオピアでは、地方から雇用を求める人々が都市に流入し、都市への人口集中が進んでいる。
- ② 該当する。オーストラリアでは、沿岸部にある大都市のシドニーとメルボルンに人口(それぞれ 500 万人程度)が分散している。ちなみに、首都のキャンベラは内陸部に位置し、規模がそれほど大きくない。(人口 40 万人程度)
- ③ 該当しない。韓国の首都・最大都市ソウル(首位都市)の人口はおよそ 1005 万人(2018 年末時点)であり、韓国全体の約 5 分の 1 を占める。これは人口第 2 位の都市・プサンのおよそ 3 倍である。国民の過半数が首都圏に居住する韓国では、過密改善のため、政府機関など首都の一部機能を移転する取り組みも進められている。
- ④ 該当しない。チェコの首都・最大都市プラハ(首位都市)の人口は 130 万人(2019 年時点)であり、2 位以下の都市の 3 倍以上である。これはチェコ全体の人口の 8 分の 1 程度となっている。

以上より、正解は②である。首位都市の例として、選択肢に登場したもの以外にマニラ(フィリピンの首都)やメキシコシティ(メキシコ)、バンコク(タイ)やウィーン(オーストリア)、またラゴス(ナイジェリアの旧首都)などがある。首位都市は人口爆発が起きている途上国に多く見られ、より良い生活を求めた人々が、人口に対して雇用が少ない地方から、インフラが整備され雇用機会が多い大都市に流入することで形成される例が多い。

問 3 15 正解は③

難易度 ★★☆☆☆

解説

経済発展や人口集中から発生する都市問題とその対策についての問題。不正解の生徒や、自信をもって正解できなかった生徒は、それぞれの都市の特徴を復習しよう。

- ① 正 インドにおける商業・映画産業の中心地であるムンバイは、高層ビルが立ち並ぶ一方でスラム街が広がる貧富の差が著しい地域である。ムンバイのスラム街にはよりよい生活を求めて流入する人々が多く、住民は水道などインフラが整わない住宅で生活している。
- ② 正 ドイツでは国民の環境に対する意識が高く、特にフライブルクは環境保護に関する先進的な取り組みを行う都市として知られている。行われている取り組みとして、選択肢に挙げられている「中心市街地への家用車の流入規制」「路面電車(LRT)の整備」(これらにより、最寄り駅等へ車で向かった後目的地までは公共交通機関を利用する「パークアンドライド」が進められている)のほかに、「再生可能エネルギーの積極的活用」などが挙げられる。
- ③ 誤 ニューヨーク都心部では、インナーシティ問題(大都市の中心部が、建物の老朽化などが原因で衰退す

る現象)の解決のため、再開発により高級住宅や高級店舗、大企業本社などが進出し、地価の高騰(やそれに伴う家賃上昇)が起きている。その結果高所得者層が流入し、低所得者層が転出する「ジェントリフィケーション」が進行している。

- ④ 正 北京では経済発展が優先され、環境対策が遅れた結果、工場の煤煙や自家用車の排気ガスなどを原因とする大気汚染が深刻化した。

以上より、正解は③である。

問 4 16 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

ホンコンの労働者総数・労働者に占める管理職・専門職従事者の割合から国名を判定する問題。それぞれの国の経済的特徴から判定していこう。

「労働者総数に占める管理職・専門職従事者の割合」に注目してほしい。4つの選択肢のうち、②③は80%前後と高く、①④は10%未満と低くなっている。「労働者総数に占める管理職・専門職従事者の割合」が高い国は、専門的な知識・技能を学んだ労働者を多く送り出している先進国だと言える。逆に低い国は、単純労働者の多い発展途上国と考えられる。これらのことから、②③は先進国であるイギリス・日本のどちらか、また①④は途上国であるタイ・フィリピンのどちらかであると判定できる。これを踏まえてそれぞれの選択肢を見ていこう。

- ① **フィリピン**。労働者総数が非常に多いことから判断できる。人口増加率は高いが雇用が少なく、若年層の失業率が高いフィリピンでは、国家政策として外貨獲得のための出稼ぎが進められている。その結果、多くの労働者が海外で働き、フィリピンの経済を支えている。香港で働くフィリピン人労働者が多い理由として、距離的な近さだけでなく、英語でのコミュニケーションがとりやすいこと(香港はイギリス、フィリピンはアメリカの植民地であったため、どちらも英語話者が多い)が挙げられるだろう。職種としては、主に女性が香港の家庭でメイドとして家事に従事する例が多い。
- ② **イギリス**。1997年に中国に返還されるまで、香港はイギリスの植民地であったため、香港にはビジネスに携わるイギリス人労働者が多く居住していた。しかし、返還以降中国の影響力が強まり、イギリス人労働者の数は大きく減少している。
- ③ **日本**。香港が「アジア NIES」として発展した1970年代以降、ビジネス拠点として日本企業の進出が進んだことに伴い、日本人の管理職・専門職従事者が香港で勤務している。
- ④ **タイ**。タイは人口増加率が低く、工業化が進んでいることから、出稼ぎ労働者の数は少ない。職種はフィリピンと同様に家庭内労働が多く、管理職・専門職の割合は低くなっている。

以上より、正解は①である。

問 5 17 正解は④

難易度 ★★★★★

解説

地域間の人口移動に関する表から都道府県を判定する問題。距離的な近さと人口規模を組み合わせた判定が必要となる。いくつかのステップに分け、落ち着いて判断していこう。

まず、選択肢の都道府県は東北地方の 2 県(宮城県・秋田県)と中国地方の 2 県(鳥取県・岡山県)にわけることができる。それぞれの位置関係を考えると、東北地方の 2 県は東京都、中国地方の 2 県は大阪府との結びつきが強いと判断できる。このことから、カ～ケの東京への転入者数と大阪への転入者数をそれぞれ比較すると、東京への転入者数が多いカ・クは東北地方、大阪への転入者数が多いキ・ケは中国地方の県とわかる。これを踏まえてそれぞれの選択肢を見ていこう。

- ①カ 宮城県。上記よりカは宮城県か秋田県のどちらかであるが、「カから東京都への転入」「東京都からカへの転入」がクと比較して著しく多いことを考えると、地方中枢都市である仙台市が位置し、東北地方の中心として東京都の結びつきが強く、人口も多い宮城県がカと考えられる。
- ②キ 岡山県。岡山県は大規模な工業地帯である水島コンビナートや、政令指定都市の岡山市を有するため周辺地域からの転入が多いと考えられる。そのため、大阪府からの転入が比較的多く、同じ中国地方のケからも多くの人口が流入するキが岡山県と言える。
- ③ク 秋田県。東北地方に位置するほか、カ(宮城県)への転入が多いため、秋田県と判断できる。秋田県は少子高齢化と人口流出により、2020 年現在 7 年連続で人口減少率 1 位を記録している。
- ④ケ 鳥取県。鳥取県の人口は約 60 万人と全国で最も少なく、従って転出者の絶対数も少ないと推測できる。また、工業などが発展しており、地理的な近さから結びつきが強い岡山県への転出者数が多い。これらのことから、転出者数が総じて少ないが、大阪府やキへの転出が目立つケが鳥取県と言える。

以上より、正解は④である。

問 6 18 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

メッシュマップの読み取りを通し、都市の構造を判断する難問。都市の概要から、どの場所にどのような人々が住んでいるかを考えていこう。

- サ 高位となっているのは、地価最高地点の周辺であり、都市の中心部と言える。このような地域は家賃が高いが利便性に優れ、学生など短期間居住する人々が多いため居住者の流動性が高い。そのため、サが「総人口に占める居住期間が 5 年未満の人口割合」といえる。
- シ 高位となっているのは、都心から少し離れた道路沿いなどの地域である。これらの地域は地価が安く住民の経済的負担が小さいが、都心へのアクセスは良く利便性が高いため、両親と子どものみで構成される核家族向けの住宅(一般的な「ファミリー向け物件」)が多い。そのため、シが「総世帯数に占める核家族世帯割合」

といえる。

ス 高位となっているのは、都心から離れた地域である。道路網があまり整備されず、開発も進んでいないこれらの地域は、農業など第一次産業が盛んに行われる地域となっている。そのため、第一次産業の従事者が多くスは「第一次産業就業者世帯割合」と判断できる。

以上より、サ-居住期間が 5 年未満の人口割合、シ-核家族世帯割合、ス-第 1 次産業就業者世帯割合の組み合わせとなる①が正解である。

(小池優希, 柿沼麻衣花)

2020 年度 センター試験 本試験 地理 B

第 4 問

出題範囲	東南アジアとオセアニア
難易度	★★★★☆
所要時間	得意：8分　ふつう：9分　苦手：10分
傾向と対策	特定の地理に関する知識があると容易に解答できる問題が多く、日頃から地理の勉強をしてきた受験生とそうでない受験生で差がつく大問であった。特に問 1 ではマリアナ海溝に関する知識、問 6 はインドネシアの宗教に関する知識があればすぐに解ける問題であった。今回よくわからなかった選択肢については、しっかり復習し、次回以降解けるようにしたい。

問 1 19 正解は③

難易度 ★★★★★

解説

地図上で水深の最も深い場所を考える問題。

水深が非常に深い場所を含む海域とは、海溝が存在する海域のことをさしている。

地図をみると、ウのあたりには世界で最も深いチャレンジャー海淵を含むマリアナ海溝がある。よってウが正解である。なお、アやイ付近は大陸棚であり、エ付近は太平洋中央部で海溝はないため深さ 3000m 程度の海域と考えられる。

以上より、正解は③である。

問 2 20 正解は④

難易度 ★★★★★

解説

月平均気温と月降水量のデータから該当する地域を考える問題。こういった問題では、月平均気温が高い時期を見るだけで南半球と北半球のいずれに属するか知ることができるので、最初に必ず確認するようにしよう。また、それぞれの地域がどの気候帯に属するかも知ることができる。最寒月の平均気温が 18℃など、気候帯ごとにカギとなる値については覚えておこう。

- ① 年間を通じて最も気温が低い月が 7 月になっていることから、南半球に位置する地点とわかる。また、他の 4 つのグラフと比べて年間を通じて非常に降水量が少ない。このことから、南半球に位置する B と D のうち、内陸部に位置する B と考えられる。なお、気温の年較差が大きいことから内陸部に位置することが考えられる。
- ② 年間を通じて気温が高く多雨である。よって、熱帯雨林気候の C が当てはまる。A と迷った人は以下も参考

にしてほしい。一般的に赤道直下の地域では常に赤道低圧帯が発生しているため年中多雨となる一方で、赤道から離れるにつれ亜熱帯高圧帯の影響下におかれる時期ができ乾季と雨季ができるようになる。また、島では内陸部に比べ気温の年較差が生じにくく、降水量も多くなりやすい。今回、C は A より赤道に近い島をさしているため、熱帯雨林気候と考えられる。

- ③ 気温の変化から、北半球に位置していると考えられる。また、雨季と乾季がはっきりとみられることから、モンスーンの影響で夏季に降水量が多くなる A とわかる。A はタイのバンコクである。東南アジア地域では、夏季に南西から、冬季に北東から季節風が吹く。この影響から、バンコクでは 4~10 月ごろの降水量が多くなっている。
- ④ 気温の変化から、南半球に位置しているとわかる。また、気温の年較差が小さいことから海洋性の気候と考えられる。よって、西岸海洋性気候の D とわかる。

以上より、正解は④である。

問 3 21 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

それぞれの国の生産量について、世界に占める割合から、その品目を考える問題。キとクの判別が難しいこと、選択肢の品物がややマイナーであったことから難問といえる。

カ 世界に占める東南アジアでの生産量が非常に多い。コプラ油の加工前であるココヤシは年中高温な低地に生育する。問題文にある 3 択のうち、東南アジアが世界の生産の中心になっているのはカである。実際のデータを見ても、ココヤシの生産量はインドネシア、フィリピン、インドの順（2018 年）に多く、東南アジアの国で生産が盛んであることが読み取れる。

キ 残っているのはサトウキビと茶である。キとクにおいて大きく異なる点はオーストラリアの生産量である。オーストラリアは砂糖の輸出量世界 3 位（2013 年）であり、熱帯であるオーストラリア北東部のケアンズを中心にサトウキビの生産が盛んである。このことから、オーストラリアで一定割合生産されているキはサトウキビとわかる。なお、茶がインドや中国などアジアを中心に生産されていることから推測してもよい。

ク キの解説を参考にしてほしい。

以上より、コプラ油 - カ、サトウキビ - キ、茶 - クの組み合わせとなる①が正解である。

問 4 22 正解は③

難易度 ★★★★★

解説

世界の産出量に占める割合から該当する鉱山資源を考える問題。それぞれの鉱山資源が産出される地域の特徴を考えて解くとよい。

まず、それぞれの鉱山資源が産出される地域の特徴について考える。

すず 東南アジアやアンデス山脈で主に産出される。中国の産出量が世界の生産量の 46.3% を占め (2013 年)、
ついでミャンマーやインドネシアで産出量が多い。(2016 年)

鉄鉱石 石炭は古期造山帯、石油は新期造山帯に多いが、鉄鉱石は安定陸塊に多く埋蔵している。産出量は、中
国、オーストラリア、ブラジルの順で多い。(2015 年)

ニッケル フィリピンやインドネシア、カナダやロシアで生産量が多い。特に近年、中国資本によるインドネシ
アでのニッケル生産が急増し生産量はインドネシアが最も多かったが (2013 年)、政府がニッケル鉱石の輸
出を禁止する方針を提示したため、2016 年にはフィリピン、ロシア、カナダの順に変化し、インドネシア
での生産量は世界 6 位にまで低下した。

ボーキサイト 赤道を中心に現在または過去に熱帯雨林であった地域で産出される。現在、オーストラリア、中
国、ブラジルの順で産出量が多い。(2014 年)

次に表 1 から①～④がどの鉱山資源を指しているかを考える。

- ① 東南アジアの大陸部・島嶼部いずれの生産量も多いことからすずとわかる。
- ② 東南アジアの島嶼部で生産量が多いことから、ニッケルとわかる。特にニッケルはフィリピンでの生産が多
い。
- ③ オーストラリアに産出が集中していること、東南アジア島嶼部でも生産が盛んなことから **ボーキサイト** とわ
かる。ボーキサイトは熱帯雨林を中心に産出され、東南アジアでも生産が盛んである。
- ④ オーストラリアに産出が集中している一方で、東南アジア島嶼部では生産が盛んでないことから鉄鉱石とわ
かる。鉄鉱石は主に安定陸塊で産出されるため、地域のほとんどが新期造山帯に属する東南アジア地域では
産出が盛んではない。

以上より、正解は③である。

問 5 23 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

貿易量や輸出量・輸入量の比から国を考える問題。輸出量と輸入量の比だけではなく、貿易量の大小も考えて
解くとよい。以下、解きやすい順番に記述していく。

シ どの国との貿易量も非常に多くなっていることから、中国とわかる。中国は人口が多く、世界第 2 位の GDP
をほこり (2018 年)、貿易量も多くなっている。

サ 中国との貿易量が非常に多く、シ、セに対して大幅な輸出超過となっていることから、農業大国・資源大国
であるオーストラリアと考えられる。オーストラリアは、企業的農業や鉱山資源の採掘が盛んであり、農産
物や鉱山資源の輸出が多くなっている。また、オーストラリアでは第二次世界大戦直後は旧宗主国であるイ
ギリスとの貿易が中心であったが、イギリスの EU 加盟に伴い近年ではアジア諸国との貿易を増加させてお
り、タイやマレーシアなど様々な国と FTA を結んでいる。

ス 中国、オーストラリアについて貿易量が多いことからタイと考えられる。タイは、中国やオーストラリアといった大国だけではなく、生産拠点・労働力供給元としてラオスなどの ASEAN 後発国（CLMV 諸国）との結びつきも強い。

セ どの国との貿易量も少ないことから、4 カ国の中で最も経済発展が遅れているラオスとわかる。ラオスはインドシナ半島諸国の中でも最も経済規模が小さく、後発発展途上国の一つである。なお、ラオスでは山がちな地形を生かした水力発電が盛んであり、電力が主要な輸出品目となっている。

以上より、正解は①である。

問 6 24 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

東南アジアとオセアニアの国・地域についての文を読み、誤っている選択肢を選ぶ問題。いずれも知っている方がいい知識を前提とした選択肢なので、わからなかった選択肢は復習してほしい。

- ① 誤 インドネシア全体ではイスラム教を信仰する人が全体の 87.2%（2010 年）を占めるが、バリ島では島民の約 9 割がヒンドゥー教を信仰している。
- ② 正 オーストラリアでは非ヨーロッパ人の移民を制限するなど白豪主義による移民政策が行われイギリス人中心に移民が行われてきたが、第二次世界大戦後にはヨーロッパの他の国々からの移民が増加した。また、オーストラリアの経済成長にはより多くの低賃金労働力が必要となり、労働力確保のため 1972 年に移民制限制度が撤廃され、多文化主義政策に移行していった。
- ③ 正 シンガポールは中国語、英語、マレー語、タミル語の 4 言語を公用語としている一方で、学校教育で英語と母語を習得することが求められており、ビジネスの場では英語が多用されている。なお、日常会話では、シングリッシュといわれる独特の英語が用いられている。
- ④ 正 ベトナムは 19 世紀以降フランスに占領された影響で、サンドイッチやフランスパンといったパン食文化が残っている。また、カフェでコーヒーを飲む習慣もある。なお、ベトナムの食文化はフランスより以前にベトナムを支配していた中国の影響も強く受けており、米が主食であり醤油を使った料理が多くなっている。

以上より、正解は①である。

（柿沼麻衣花，衛藤健）

2020 年度 センター試験 本試験 地理 B

第 5 問

出題範囲	中国とブラジル
難易度	★★★★☆
所要時間	得意：8分　ふつう：9分　苦手：10分
傾向と対策	難易度としては標準的な問題が多かったが、問1のように若干難しい問題もあった。ただ、すべての問題において与えられた図と基本的な知識を複数組み合わせることで正答にたどり着ける。例えば、問3は各国の経済成長の度合いや主力産業といった基本的ながら幅広い知識が必要な問題だった。

問1 25 正解は②

難易度 ★★★★★

解説

長江とアマゾン川のそれぞれについて、流域の標高、月平均流量を示したグラフとの対応を問うた問題。それぞれ検討していこう。

流域の標高に関するグラフを見ると、イは河口から 3000km 離れた地点でも標高が数百 m ほどなのに対し、アは河口から 3000km 離れた地点での標高が 1500m 近い。それぞれの流域の地形について考えると、長江の上流部はチベット高原にかかっており、上流の標高は非常に高いことが想起できる。よって長江がアに対応し、アマゾン川がイに対応する。

月平均流量に関するグラフを見ると、1 年を通じて B より A の方が流量は多い。それぞれの流域を考えると、アマゾン川の流域は熱帯にあたるため降水量が一年中多いと考えられるのに対し、長江の流域は中下流部に温帯冬季少雨気候 (Cw) の地域が、上流部には降水量が特に少ない内陸の地域があり、相対的に降水量は少ないと考えられる。よって、A がアマゾン川に対応していると考えられ、B が長江に対応する。

以上より、正解は河川の勾配 - ア、月平均流量 - B となる②である。

問2 26 正解は③

難易度 ★★★★★

解説

州・省ごとの生産地・生産量を示したカ〜クのそれぞれの地図と牛乳・小麦・バナナを対応させる問題。特にカとキの判別が難しい。各地域の気温や降水量をもとに考えていこう。

カ 中国では黄河下流域を中心に、ブラジルでは南部の地域を中心に生産されている。特に中国に着目して考えると、年降水量 1000mm の境界となるチンリン=ホワイ線のすぐ北側で栽培されていること、東北地方が

大産地となっているキより温暖な地域で生産されていることから、小麦であると考えられる。小麦は冷涼少雨な気候を好み、特に年平均気温 14～20 度、年降水量 500～750mm の地域で盛んに栽培される。

キ 中国では東北部で、ブラジルでは南部で主に生産されている。これは牛乳である。乳牛は夏に冷涼な気候を好む。さらに、ヨーロッパの北海沿岸（オランダなど）のような肥沃ではない地域で酪農が盛んに行われていることからわかるように、乳牛は作物の栽培に向いていない地域でも飼育が可能である。よって、中国東北部のような肥沃ではない土地で盛んに生産されているのは牛乳であると考えられる。

ク 最もわかりやすい。中国ではより温暖な南の地域に集中する一方、ブラジルでは国土の南北を問わず生産されていることがわかる。よってこれはバナナである。バナナは熱帯を中心とする温暖な地域（具体的には年平均気温 21 度以上の地域）で栽培されている。

以上より、カ - 小麦、キ - 牛乳、ク - バナナの組み合わせになる③が正解である。

問 3 27 正解は③

難易度 ★★★★★

解説

BRICs 各国の産業構造に関する問題。各国の経済発展の度合いや特徴的な産業に関する知識が必要になる。問題に取りかかる前に、ここで示されているのはあくまで各国内の製造業生産額に占める各品目の割合であることを確認しておこう。

サ 4 カ国の中でも特に工業化が進んでいる中国で特に割合が高い。よって、これは機械類である。

シ インドとロシアで特に割合が高いが、中国ではほとんど生産されていないことがわかる。これは石油製品である。他の品目と比べたときにロシアで割合が高いことがヒントになる。ロシアにはヴォルガ＝ウラル油田やチュメニ油田など油田が多数存在しており、天然ガスと合わせてヨーロッパ諸国に多く輸出されている。このことから、国内産業に占める石油製品生産の割合も多くなると想起できるだろう。ただ、インドで割合が高いことで戸惑った人もいるのではないかと。実はインドは原油を多く輸入する一方、製油所で精製したナフサや自動車用ガソリンといった石油製品をシンガポールや UAE といった国々に多く輸出している。この事実を覚えておく必要はないが、ここでの分類が石油「製品」となっていることがその戸惑いのもとになっていることは理解しておきたい。

ス ブラジルで特に割合が高く、他の国でも一定程度の割合を占めている。これが食料品・飲料である。大豆や砂糖を多く輸出するブラジルで割合が高いことは容易に理解できよう。また、どんな国でも自国民に供給するだけの食料品は一定程度必要なことから、極端に割合が低いということはほとんどありえない。

セ インド・中国で割合が高く、ブラジル・ロシアでは割合が低い。よってこれは繊維品である。繊維品の生産が労働集約的であること、（特にインドでは）綿花の生産が盛んなことなどから判断できる。

以上より、③が正解である。

問 4 28 正解は②

難易度 ★★★★★

解説

この大問では最も容易な問題で、できるだけ正答にたどり着きたかった。前提として、両者の指標は「トンキロ」であることから、運ぶものの重さ・運ぶ距離が大きいほど指標も大きくなることを確認しておきたい。

まず、選択肢を①②と③④に分けて考えよう。①②は鉄道貨物輸送量も国内航空貨物輸送量も多い国、③④は鉄道貨物輸送量の量に比して国内航空貨物輸送量が少ない国である。その中間に、鉄道貨物輸送量の面では①②に近く国内航空貨物輸送量の面では③④に近い国としてロシアが挙げられている。

まず①②と③④のそれぞれにどの国が分類されるか考えよう。国内航空貨物輸送量が①②では比較的多いこと、③④では少ないことが特徴だった。航空機による輸送はコストがかかることから重量物の輸送には適しておらず、半導体等の電子部品や化学製品といった軽量な高付加価値の物品の輸送に適している。よって、①②の国では上記の生産が多く行われていると考えられる。よって、アメリカ合衆国、インド、中国、ブラジルのうち、経済発展が進んでおり高度な工業製品が作られるアメリカ合衆国と中国が①②のいずれか、そうではないインドとブラジルが③④のいずれかにあたると考えられる。

次に中国が①②のどちらかに該当するかを考えよう。①②は鉄道貨物輸送量が同じような値になっているが、国内航空貨物輸送量には大きな差がある。前段階における説明から、より経済発展しており高度な製品が作られると考えられるアメリカが①、そうではない中国が②と考えられる。

なお、③④の判別時には鉄道貨物輸送量の差が重要になる。国土全体を鉄道網が覆っているインドと、熱帯雨林が多いため鉄道網がインドほど発達していないブラジルという対比を見出すことができれば、③がインド、④がブラジルにあたると考えられよう。

以上より、正解は②である。

問 5 29 正解は②

難易度 ★★★★★

解説

中国とブラジルのそれぞれについて、その国籍を持つ日本国内の居住者、日本出身の現地居住者を示したグラフとの対応を問うた問題。それぞれ確認していこう。

日本国内の居住者に関するグラフをみると、タは1990年から2000年にかけて急激に増加しているのに対し、チは2000年代以降に急激に増加していることがわかる。よって、タがブラジル、チが中国に対応する。1990年に入国管理法が改正されて日系人に在留資格が与えられるようになったことで、1960年ごろまでにブラジルに移民した日本人の子供・孫世代が出稼ぎ労働者として日本に流入するようになった。また、中国の経済成長が目立つようになった2000年代以降、留学生などとして日本に流入する中国国籍の人が増加した。

各国における日本出身の居住者に関するグラフをみると、Xは一貫して増加傾向、Yは減少傾向にある。Xは前段落と同じ理由から中国に、Yはブラジルに対応する。ブラジルにおける日本出身者の減少は、日本で生まれ

てブラジルに移民した日本人（いわゆる日系 1 世）が高齢化して減少していることが原因になっている。

以上より中国またはブラジル国籍をもつ居住者数 - X 、日本出身の居住者数 - Y の組み合わせとなる②が正解である。

（衛藤健，柿沼麻衣花）

2020 年度 センター試験 本試験 地理 B

第 6 問

出題範囲	地域調査
難易度	★★☆☆☆
所要時間	得意：8分　ふつう：9分　苦手：10分
傾向と対策	例年通り、地域調査に関する問題が出題されている。しかし、例年に比べても地理の細かい知識を必要とせず正答にたどり着ける問題が多い。特に問 2、問 5、問 6 は一般的な地図やグラフの読み取り技能だけで正答できる。一方で問 1 のようにやはり知識が必要な問題も存在している。地域調査の問題は大学入学共通テストでも出題されると考えられるので、他年度の問題と合わせて形式に慣れておきたい。

問 1 30 正解は⑤

難易度 ★★★★★

解説

夏季の気温の日較差と冬季の総降水量から 3 地点を御前崎、甲府、東京と対応させる問題。

夏季の気温の日較差を見ると、アがイ、ウと比べて大きい。よってアは内陸部の地域だと推測でき、3 地点のうち甲府だとわかる。冬季の総降水量を見ると、ウが他のア、イと比べて多い。よってウは、日本海側に雪を降らせた後の乾いた風が北西から吹き降ろす東京ではなく、御前崎だと考えられる。同時にイが東京とわかる。

以上より、ア - 甲府、イ - 東京、ウ - 御前崎となる⑤が正解である。

問 2 31 正解は②

難易度 ★★★★★

解説

地理の特別な知識は必要なく、図 2 から平野や山地の様子をイメージして図 3 と結びつければ正答にたどり着ける問題。

図 3 より、最奥には左右に山地が広がり、その手前に平地が広がっている。その平地は手前側に向かって狭くなっていくが、最手前でも中央部に平地が広がっている。この条件に合うのは②のみとなる。

以上より、正解は②である。

問 3 32 正解は②

難易度 ★★★★★

解説

この地図では扇状地が地図の左側から右側にかけて広がっている。ところどころに表記されている標高を見ると地図の左側で約 500m なのに対し、右側で約 400m に下がっていることから推測できるだろう。A が立地する築山のみもとが扇頂、D の側が扇端にあたる。扇状地について把握していなくても一つずつ考えれば解くことができる問題だが、把握するに越したことはない。

- ① 「1916 年ごろには御勅使川の河道に位置していた」という記述から、地図中の「石積みの堤防」で囲まれた部分にあると考えられる。よって、B についての記述である。「直線的な道路が整備され」ていること、「住宅や農地がみられる」ことも地形図から確認できる。
- ② まず、後半の「果樹栽培が広くみられるようになった」という記述から A または D に絞られる。前半の「徳島堰から地形の高低差を利用して」という記述から、この地点は徳島堰より低い場所にあると考えられる。よって、築山の上に位置しており周りの地点よりも標高が高い A ではないということがわかる。よって、D についての記述である。
- ③ 「扇状地よりも高い位置にあり」という記述から、A についての記述である。
- ④ 「古くからの集落」であること、「公共施設がみられる」ことから、C についての記述である。C 付近は地形図上で色が違う人口密集地域で、学校などがみられる。

以上より、正解は②である。

問 4 33 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

文章を読んでつながりを理解できれば正答できる問題。このような問題は確実に正答しておきたい。

- サ 適切なのは**通気性**。養蚕を行うために向上させたものだから、防音性ではない。上質な繭を作るためには通気性や広い空間が必要であるとされている。また、写真 1 をみると家屋に窓がついていることから、防音性より通気性が重要であると推測できるだろう。
- シ 図 5 をもとに考える問題。1975 年から 1992 年にかけて神金地域における養蚕戸数は徐々に減少している一方、塩山地区の養蚕戸数に占める割合は 1980 年代にかけて上昇している。これは神金地域の養蚕戸数の減少ペースが他地域の減少ペースより遅いことを示しており、神金地域では遅くまで養蚕業が維持されていたことがわかる。

以上より、サ - 通気性、シ - 遅くまで行われていたとなる①が正解である。

問 5 34 正解は③

難易度 ★★★★★

解説

地図の読み取りだけで正答できる問題だった。特段の知識は必要がないので、しっかりと正答したい。

- ① 店舗面積 10,000m² 以上の大型小売店は「■」で示されている。1991 年の地図を見ると、甲府駅から半径

1km 以内には 3 店が立地している一方、半径 1km 以上離れた地域には 1 店のみが立地している。よって、誤り。

- ② 甲府駅から半径 1km 以内の 10,000m² 未満の大型小売店の数を数えると、1991 年は 9 店だったのに対し、2017 年には 5 店に減少している。よって、誤り。一見見比べただけでも、減少していることがわかるだろう。
- ③ 2017 年時点で店舗面積 10,000m² 以上の大型小売店が立地している甲府バイパスより南側の場所をみると、1991 年時点で農地（網掛けの部分）だったことがわかるだろう。そもそも 1991 年時点では甲府バイパスより南側の地域ほとんどが農地だった。よって、正しい。
- ④ 2017 年時点での甲府バイパスより南側の店舗面積 10,000m² 以上の大型小売店をみると、どの店舗も駅から遠いことがわかる。甲府駅周辺にひかかれている半径 1km の範囲を参考にすると、最も駅に近い店舗でも最寄り駅から 1km 程度は離れていることがわかるだろう。よって、誤り。

以上より、正解は③が正解である。

問 6 35 正解は①

難易度 ★★★★★

解説

- ① 2010 年から 2017 年にかけての人口の自然増加率と社会増加率をみると、常に+約 0.5%以下の社会増加（人口の社会的増加）と-1.0%程度の自然増加（人口の自然的減少）が起きていることがわかる。よって差し引きすると常に人口は減少していることがわかり、誤り。
- ② 人口の社会的増減は「転入 - 転出」で定義される。社会増加率が 0%より大きいと、転出人口より転入人口が上回っているということになる。よって、北杜市では社会増加率がマイナスになった 2015 年以外転入者の数が転出者の数を上回っていることになり、正しい。
- ③ 高齢者は「65 歳以上」として定義される。図 8 をみると、東京都・神奈川県からの転入者は 65 歳以上が山梨県・長野県に比べて多いことがわかる。山梨・長野からの移住者は東京・神奈川に比べて 5 歳～14 歳や 15～29 歳が多い。よって、正しい。
- ④ 図 8 をみると、山梨県内からは 30～64 歳の移住者が多いことがわかる。また、5～14 歳の転入も他の都県に比べて多くなっており、記述と合致する。よって、正しい。

以上より、正解は①である。

（衛藤健，柿沼麻衣花）